

土佐日記の女性仮託という方法が意味するもの： その文学史的位罫づけの再考に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 隆 メールアドレス: 所属: 大阪女子短期大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-015

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	土佐日記の女性仮託という方法が意味するもの：その文学史的位置づけの再考に向けて
Author	水谷, 隆
Citation	文学史研究. 56 巻, p.68-79.
Issue Date	2016-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

土佐日記の女性仮託という方法が意味するもの

——その文学史的位置づけの再考に向けて

水谷 隆

一、土佐日記冒頭の文の解釈

土佐日記冒頭の「をとこもすなる日記といふものををむなもしてみむとするなり」という一文は、はやく北村季吟が「男の日記といふ物かく事あるをまねびて女もすると也。只今女のかけることばなれば、おとこもすといふと、もの字を書たるにや」(土佐日記抄)と述べて以来、日記とは通常男性が書くものであるが、それにならつて女性である自分も書いてみる、という趣旨をあらわしているものとして説明されることが多い。しかし、この一文をどのように解釈する場合、「本来、日記といふものは、それが公日記であるにせよ私日記であるにせよ、男子が通常は記録するものであるから、男主女従の対比関係を示すためには「男のすなる日記といふものを女も」とあるのが、正常な構文であるはずである。」という疑問が、どうしても生じるにもかかわらず、それに対する説明を真正面から試みたものはさほど多くない。

その多くはない説明の一つに、「この係助詞「も」の示す対比関係

には、単なる並列ではなく、先後誘引の相互作用も有しているようである。ことに、前に用いた「も」に強い牽引力があつて、後者を誘い出すような場合が多い。口語の例ではあるが、「僕もゆくから君もゆけ」の初めの「も」と同様、強い決意を示して、下の「も」を誘い出す立場にある。」というものがある。しかし、この説明が成り立つのは、前の「も」の示すものの方が、後の「も」で示されるものよりも「も」に下接する動詞の表すことがらを為す必然性が同等もしくは考えにくい場合に限られる。右の例で言えば、「僕」の行く必然性が「君」よりも薄弱だからこそ、「僕」のようなものでさえ行くのだから「君」が行かないわけにはいかないだろうと言えるのであつて、「僕」の行くことが「君」の行くこと以上に当然のことである場合、「君」に、行くことを誘い出す契機にはならない。土佐日記の場合も、女が日記を書く必然性の方が男が書く必然性よりも高くなければ、こうした説明は合理性を持たない。

この他に「をとこもす」の「も」は、「男文字」を暗示するといふ説や、「男も」の「も」は、「男」を不確定なものとして扱ふ(大野晋氏)。「男のすなる日記」と言えば、男しか書きようのない日記、す

なわち漢文日記を特定すると考えられるが、「男も、すなる」と表現することで、漢文日記を指しながら、かならずしもそれにこだわらなくなる^(注六)という説などがある。しかし、これらもやはり、すんなりとは理解したい。

ここまで見てきたのは、「をとこも」の係助詞「も」の意味用法を、並列あるいは添加と説明されるものとは異なるものと仮定し、そのありようを詮索するありかた、あるいは「も」をそもそも係助詞としてではなく別語「もし」の省略されたものとして見る方法であった。しかしそれらがいずれも十全な説明になり得ていないのは、その方法自体に無理がある、ということなのではないか。そのように考えるとき、「をとこも」すなる日記といふものを、をむなもしてみむとてするなり」という一文を、男が日記を書くことと女が日記を書くことを並べて記述したものととして、そのまま受け取り、そうした理解が矛盾を来さないような文意の把握につとめるという方法が試みられてしかるべきと思う。

そうした立場での説明としては、小松英雄氏の

文脈に即していえば、「をとこ」は、責任ある立場の男性を指している。この旅行では、責任者の男性も、日記を記して帰着するまでの経過を記録することになっているそうである。しかし、そういう公的な日記に記載されるはずのない出来事でも、どの日にもどのようなことがあったかを後日に参照しなくなることがたくさん起こるはずであるから、女性の自分も「日記」というものを書くことにする。これが「をとこも」をむなも」という対比の趣旨^(注七)であろう。

という言及がある。本稿も、こうした方向性での理解、すなわち、「をとこも」すなる日記^(注八)の「をとこ」を、「船の中の責任者である特定の男」と理解し、その特定の男も日記を書くし、ある特定の女、すなわち自分も日記を書くという趣旨を表したものととして、土佐日記冒頭の文章を把握することを試みたいと思う。以下、しばらくその理由について述べる。

「も」の意味用法を詮索する従来の説では、土佐日記冒頭の「をとこ」を、日記を記すのにふさわしい男性、あるいは男性官僚全般と理解してきた。なるほど、土佐日記が作られたころの「をとこ」という語には、

この子、いと大きに成りぬれば、名を、三室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。おとこはうけきらはず。呼^(注九)び集へて、いとかしこく遊ぶ。

(竹取物語)

のように、男性全般を指し示すものとして用いられたと思われる例が認められる。ただ、その一方で、単独の「をとこ」の語が、漠然と男性全般を意味するのではなく、ある特定の人物を指して使われたとおぼしい例もある。たとえば、伊勢物語のいくつかの章段は「むかし、おとこありけり」として語り始められる。それらの「男」は、無論、男性全般を意味するのではなく、「むかし、きのありつねといふ人ありけり」(十六段)の「紀有常」や、「むかし、賀陽の親王と申すみこおはしましけり」(四十三段)の「賀陽の親王」などの固有名詞とも入れ替え可能な、ある特定の個人を指すものと考えられる。またたと

えば、

男の萩の花みたる所

おなじえに花はさけれど秋萩の下葉にわきて心をぞやる

(貫之集^(年三) 109)

は、延喜十八年に詠まれた月次の屏風歌中の一首であり、ここに言う「男」は、おそらくは萩の花の絵の傍らに描かれているのであろうところの、ある一人の男性を示すことになる。また、

をとこの人のくににまかれりけるまに、女にはかにやまひをし
ていとよくなりける時よおきて身まかりにける

よみ人しらず

こゑをだにきかでわかるるたまよりも

なきとこにねむ君ぞかなしき

(古今和歌集 哀傷 858)

の「をとこ」も、この歌の詠み手である「女」の夫もしくは恋人という、特定の人物を示していると理解しなくてはならない。

右に見たように、文章の冒頭に、「或る」等の限定する言葉を伴わずに提示された「をとこ」の語が、男性全般ではなく、ある特定の男性を意味する場合も、少なからず存するのである。こうした「をとこ」という語の使い方が、当時、相当程度一般的だったのであれば、土佐日記冒頭の「をとこ」も、男性全般を意味するのではなく、やはり、特定の人物、すなわち、貫之一行中のある男性を示しているのだと理解されるものであった可能性が十分に考えられる。そして、そのように考えられるならば、「をとこ」の「も」は、係助詞の意味用法として通常考えられているものとして、無理なく理解ができる。す

なわち、船旅の記録を日付とともに記すことは、早くは斉明紀五年七月条の伊吉連博徳の書にも見られ、また、土佐日記への影響が取りざたされる入唐求法巡礼行記もその例の一つとして認められる。^(年十四)このことからすれば、前土佐守、紀貫之一行中のある男性である貫之自身^(年十四)が、その道中の日次の記録を書くことは、当時の一般的な認識として十分にありえることだったろう。そのような、古来、さまざまな人たちが記してきた船旅の日記を、貫之一行中の、ある男も、そうした例に倣ってするらしい、と聞きつけた女が、それではその日記というものを私としてみよう、と宣言したものととして、土佐日記冒頭の一文はすんなりと受け取ることができるのである。

いったい、紀貫之が土佐日記を執筆するにあたっては、自らのことを知る、ある特定の読者（あるいは複数の読者たち）を想定していたと考えるのが妥当と思われる。まったく誰に読ませるあてもなく、もしくは、不特定の読者を対象としてこのような作品を創作し、書き残すことは考えにくいからである。これを逆の面から述べれば、貫之が想定しただろう、この作品の当初の読者は、当然ながら筆者がさきの土佐守で、最近土佐から帰京してきた人物であることを知っていたはずである。したがって、貫之からこの作品を受け取ったその読者は、当然ながら、土佐から都までの船旅の日記という体裁の文章の内容が貫之自身の経験に基づくものであると予断を持つことになる。そのような予断をもつ人が、冒頭の「をとこ」もする日記といふものをなんなもとしてみむとするなり」という一文を目にすれば、この作品は、貫之自身が自らを女に擬して作られたものであり、また、「をとこもする日記」の「をとこ」とは、貫之自身を暗に指し示すものである^(年十五)

と理解することになるだろう。つまり、一行の「船君」たる貫之が、仮に、伊吉連博徳の書などのような記録に倣って、道中の出来事を日次形式で記録したならば、それは「をとこもする日記」と呼ばれるべきものになる。それをここでは、女性の立場になって書いてみたと言言したのが「をんなもしてみむとてするなり」という言葉だと、貫之自身が想定した読者は理解することになるのではないか。

先に述べたことを繰り返すことになるけれども、このことからして、「をとこもする日記」の「をとこ」は、先に述べたように、前国司一行中のある男性、具体的には紀貫之本人を暗に指し示しているものと考えられよう。

付言すれば、土佐日記二月八日条に、魚を船に持ってきた人に対して、船君が米でもって返礼したことについての批評をしている男性たち、つまり、船君を含まない、複数の男性のことを、

あるひとあざらかなるものもてきたり。よねしてかへりごとす。

をとこども、ひそかにいふなり。「いひばしてもつつるとや。」

と、敬意を含まない形で「をとこども」と言っているのに対して、一月二十七日条に、

かぜふきなみあらければふねいださず。これかれかしこくなげく。

をとこたちのこゝろなぐさめに、からうたに「日をのぞめばみや

ことほし」などいふ…

と、敬意を示す「たち」を用いて、船中にいる複数の男性のことを「をとこたち」と表現している箇所がある。こちらら、船を進めることのできない憂鬱を晴らすために漢詩を口にして、「をとこたち」の中に、船君という、敬意を示すべき人物を含んでいるために「た

ち」が用いられているのであろう。このことからすれば、土佐日記においては、船君、すなわち紀貫之も、「をとこ」の範疇に入る、すなわち「をとこ」と表現しうる存在として描かれていることが認められる。

二、女性仮託の意味 — 自らを演じる方法として

ここまで述べてきたように冒頭の文章を理解するとして、ではなく、貫之は、自身の経験に基づくことがらを、自身の立場ではなく、ある女の立場で綴ると宣言して土佐日記を始めたのか。

このことの理由については、これまで、加藤宇万伎の貫之土佐の国の任充ちてかへる年、いとかなくせし子の病して死たりしを飽かず歎き惜れしが、さすがに人目の女々しさを恥ぢらひて女ふみのさまに書かれしといふ

(加藤宇万伎著 上田秋成書写 土佐日記解) という言及があつて以来、男性官人としては、表だって言うことの難しい感情を記すためという方向で理解しようとするものと、いま仮名もてしるせるはめめしきわざなれば、わざと女のかけるさまにいひなしてかかれつるにこそ

(岸本由豆流 土佐日記考証) のように、女性の用いる文字である仮名でもってこの作品を記そうとしたため、と考えるものと二分されるようである。しかし、前者については、増田繁夫氏に

そもそもこの作品に記されている内容について、男性官僚の立場であればとりあげられないものと考えられる内容は存在しないといってもよいのではなかろうか。世態人情の薄きを慨くのは漢詩文の伝統的な素材でもあるし、わが子に対するめめしい情愛についても、たとえば「菅家後集」には「慰少男女」のような詩にもとりあげられている。少なくとも素材において男性の立場ではあつかえず、内容が官人の身の発言として支障があると考えられる部分は認めにくいのである。したがって、男性官人の立場から解放された立場に立つために女性に仮託したとする見解は、この作品を十分説明することにはならない。^(半井)

という当を得た批判が既にあるし、また、後者についても、

仮名の日記を男が書くのは当時の社会的通念として異例であったから、男の立場を避けたのだといふのが、定説に近いやうな形になってゐる。しかし、私は、すこし疑問をもつ。もし貫之に仮名の日記を発表しようといふ意思が有ったのなら、どうして遠慮することがあらう。大切な勅撰集の序さへ仮名文でやってのけるといふ破天荒の試みを敢行した彼が、私的な著作を仮名文で草したとて、何の憚るところも無いはずだと思ふ。日本文化を大陸文化と対等のものたらしめようとする彼の抱負よりすれば、仮名の日記ぐらゐは、むしろ大手を振って公表しさうなものである。^(半井)

という小西甚一氏の指摘に答えることは難しいように思う。

なお、仮名で書くということについては、先に引用した土佐日記考証に、

十二月廿二日 ふなぢなれどうまのはなむけす

同日 しほうみのほとりにてあざれあへり
同廿四日 ひともじをだにしらぬものしがあしはともじにふみてぞあそぶ

同廿七日 にしぐになれどかひうたなどいふ

正月七日 あをうまを思へどかひなし ただ波のしろきぞ見ゆる

同九日 海はあるれど心はすこしなきぬ

同十六日 霜だにもおかぬかたぞといふなれど波の中にはゆきぞふりける

同廿日 もろこしこの国とは ことことなるものなれど 月のかげはおなじことなるべければ

同廿一日 春のうみに秋のこのはしもちれるやうにぞありける

同日 くら鳥のもとにしろき波をよすとぞいふ

二月朔日 いその波は雪のごとくに白く 貝のいろはすはうにて
同四日 女兒のためには親をさなくなりぬべし

などの例を示した上で、

これらみなことをうらうへにいひてことばのあやをなせり。これをいたづらに見すぐすべきにあらず。さてすべてこの日記を見んには、紀氏みづからを女になしてかかれしことをつかのまもわするべからず。

と言う。この、漢文では表すことのできない「ことばのあや」が、仮名文で書いたがために可能となつていふ指摘は、貫之が土佐日記を仮名で書いた動機として、相応の説得性を持つものと思う。しかし、そうではあつても、これが女性仮託という方法の必然性を説明することにはならない。

以上のように、「をんなもしてみむとてするなり」という言葉が、仮名で書くのだ、ということの断りとしても受け取れず、また、「女々し」いことを記す、という予告とも考えられないのであれば、土佐日記の冒頭の一文は、どのような意味を持つと見ることができるのか。

さきに、この文章は、貫之自身が記したとしても不思議ではない「をとこもする日記」を、女性の立場で創作したものがこの土佐日記である、という宣言になっていると考えた。このことは、言い換えると、貫之が女のふりをして、自らの体験をもとにした話を語る、つまり自らの経験をフィクション仕立てにして自ら演じるという宣言として冒頭の一文が機能することを意味する。そして、そうした趣旨を宣言すること自体がこの一文の目的であると本稿では考えたい。

三、土佐日記に描かれた素材の性格について

そのように想定した上で、次に、このような宣言が、読者が土佐日記を享受するときに、どのような効果をもたらすことになるのか、そして、この宣言の読者に与えるだろう効果が、貫之の土佐日記執筆の意図として得心できるものであるかどうかを考えてみたい。

ここで、土佐日記とはどのような作品であるのか、その概略を再確認しておきたい。まず、作品全体を統括するものとして、土佐から京までの旅の記録があるということは異論の余地がないところであろう。その記録の中に、たとえば、土佐の国人の情けのありようや、景色の

美しさ、また海賊への恐怖、古歌への関心や、そして、任国で失った幼児を哀悼する気持ち、京の人々への批判など、様々なエピソードが素材としてちりばめられている。そのようにして土佐日記は構成されていると見ることができる。

ここにちりばめられた素材の多くは、たとえば、

くにびとのこゝろのつねとして いまはとてみえざる

(十二月二十三日)

という、任国を去ろうとする前国司に対する国人の無関心さの結果としての冷淡な態度や、

かくて京へいくに、しまさかにてひとあるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちてゆきしときよりは、くるときぞひととはとかくありける。

(二月十六日)

という、国司としての任期を無事に終え、相応の財産を蓄えて帰国したであろう人物へのご機嫌伺いを、取って付けたようにする都の人の姿など、当時の男性官人であれば、誰しも経験もしくは伝え聞いている、共感しやすいものであったと想像される。また、

かくあるうちに京にてうまれたりしをむなご、くに、てにはかにうせにしかば、このごろのいでたちいそぎをみれどなにごとみはず。京へかへるに、をむなごのなきのみぞかなしびこふる。あるひとくもえたはず。このあひだにあるひとのかきていだせるうた

みやこへとおもふをもの、かなしきは

かへらぬひとのあればなりけり

また、あるときには

あるものとわすれつ、なほなきひとを

いづらと、ふぞかなしかりける

(十二月二十七日)

に始まり、作品中何度も繰り返され、印象的に語られる、幼子を喪ったことに対する悲嘆にしても、当時の医療・栄養等の状況を勘案すれば、多くの人たちが実際に遭遇し、それが故に、共感されやすいものであったことが容易に想像できる。

こうした、多くの人たちが、経験もし、共感もしやすい素材を、貫之は自身の体験談として語るのではなく、女性仮託という方法でもって、フィクションとして提示したのである。

本稿ではさきに述べたとおり、紀貫之が、自らのことを知る、ある読者(たち)を念頭において土佐日記を執筆したと考える。そのような状況で、読者がこの作品を、フィクションとしてではなく、貫之の個人的な体験をそのまま語ったものとして受け取った場合には、作者である貫之との人間関係のありようが、語られている内容への理解・共感の前提となり、時に妨げになることも想定されよう。それに対して、読者が土佐日記をフィクションとして享受した場合は、これを一つの物語として雑念なく共感し、作品に描かれた内容に没頭することが容易になるのではないか。

土佐日記には、「かみなかしも多ひあきて、いとあやしく、しほうみのほとりにてあざれあへり。」(十二月二十二日)「ありとあるかみしも、わらはまで多ひしれて、一文字をだにしらぬもの、しがあしは十文字にふみてぞあそぶ。」(十二月二十四日)等、岸本由豆流が「ことばのあや」と言い、現在は「諧謔」、あるいは「俳諧」などと評さ

れる表現が随所にちりばめられている。そのことからして、この作品全体に、一種のエンターテインメント的な趣向が通底していることは否定できないと思う。つまり、こうした表現のおもしろさ、楽しさを味わわせることも、貫之の土佐日記執筆の一つの意図とみて間違いはないと思われる。ところが、たとえば亡児を悲しむ心情を作者の実体験そのままを表現したものとして受け取った場合、しかも、読者が貫之個人を知る人物であった場合、読者の関心は土佐日記という作品の表現よりも、貫之個人の心情へ移行してしまい、せっかく意を込めて織りなした言葉のあや、すなわち表現のおもしろさの方はなおざりにされる可能性がある。そうした享受をさせないための方法として、女性仮託という方法がとられたのではないか。

以上のように、享受者をして記述内容そのものへ没頭させるための仕組みとして、土佐日記冒頭の一文、すなわち、この作品を、女性という仮構の姿になりフィクションとして語るといふ宣言は機能しているものと考えらる。

四、フィクションとしての土佐日記と、歌俳優としての人麻呂の歌のこと — 土佐日記の文学史的位づけの再考のために

最後に、自らが女性という仮の姿になり、自らをフィクションとして演じるというのが、土佐日記の方法だと考えられるとして、それが日本の文学史上、どのように位置づけられるのかについても言及しておきたい。

今しがた述べたように、土佐日記で描かれた素材の多くは、当時の官人たちであれば、身近に経験もし、共感しやすいことがらであると考えられる。そして、それらのうちの相当程度のは、さきに引用した増田繁夫氏の指摘、「世態人情の薄きを慨くのは漢詩文の伝統的な素材でもあるし、わが子に対するめめしい情愛についても、たとえば『菅家後集』には「慰少男女」のような詩にもとりあげられている。」の通り、文学の素材としても一般に認識されていたものだったと考えられる。

ただそれらのなかで、たとえば亡き幼児を悼む心情は、そうした心情を吐露した歌が古今和歌集に一首も収められないことが端的に示すように、当時の官人が、公的な場においては、口にするこの憚られるものであったらしい。そのことに注意してみれば、

くによりはじめてかいぞくむくいせむといふなることをおもふ
へに、うみのまたおそろしければ、かしらもみなしらけぬ。

(二月二十一日)

という、海賊におびえる船君の発言も、朝廷から任命された地方官である受領の立場からすれば、公にはしにくいものであったと想像されるし、

かちとりのいはく「このすみよしの明神はれいのかみぞかし。ほ
しきものぞおはすらむ」とは、いまめくものか。(二月五日)

という、住吉の神への皮肉・批判を含んだ表現も、やはり、朝廷に奉仕する者として公的な場において口にすることは躊躇されるものであったろう。その一方で、繰り返しになるけれども、これらはいずれも、官人たちにとっては、身近で共感しやすい、つまり、私的な場い

おいて口にはせられることの大きいにありうる事柄でもあったのではない。土佐日記にちりばめられたエピソードのいくつかは、そのようなたぐいのものだったのである。

こうした、当時の官人であれば誰しもが見聞きし、共感しやすいこととでありながら、公の場において口にするこの憚られるたぐいの事柄を、仮名文による文芸に仕立てた例は、日本文学史上において土佐日記が初めてのものではない。今確認できるところでは、柿本人麻呂が「歌俳優」として詠んだ「泣血哀慟歌」(巻二・207)や「石見相聞歌」(巻二・131)が、その、ごく早い例と思われる。

「石見相聞歌」すなわち、「柿本朝臣人麻呂從石見国別妻上来時歌」は、石見国に赴任していた下級官人の、帰京に際して離別した「妻」への哀惜の情を歌ったものである。この「妻」は、その人を泣く泣く石見に置いてきたことが描かれることから、現地で娶った妻であることがわかる。下級官吏が地方に赴任し、そこで妻を得ることは、時代は下るものの、天平十六年十月十四日に「比季国司多娶所部女子為妻妾。自今以後。悉皆禁断。」と、国司が任地の女性を娶ることが多く、以後はこれを禁ずという勅令が出されていることからしても、人麻呂の当時にも、しばしばあったことと思われるし、また、この「妻」を石見に置いてきたということからは、現地妻を娶るという行為は、公の場においては、口にしたいことであっただろうことも推測される。また「泣血哀慟歌」は、「我妹子が 形見に置ける みどり子の乞ひ泣くごとに 取り与ふる 物しなれば 男じもの 脇ばさみ持ち」(巻二・210)というように、出産直後の妻を喪ったとおぼしい下級官吏の悲嘆を描いたものである。こうした、出産に起因する女

性の死は、やはり当時の医療等の状況を考えるに、しばしば経験されるものであったと想像される。そして、出産を控えた妻との面会を控えるのは、宮中に穢をもたらないための、廷臣としての義務であつたらしい。^(注一七) そのため、「さね菖 後も逢はむと」(巻二・207) 思いながら、臨月の妻のいる里へご無沙汰をしているうちに妻が亡くなつてしまい、形見として残された「みどり子」を抱いて、逢いに行かなかったことへの後悔の涙に暮れる、ということは、公の場で訴えることのしにくい悲嘆であり、なおかつ、多くの人が身近に見聞きし、共感しうることであったと思われる。

このように、人麻呂の「歌俳優」としての作は、土佐日記中に描かれた、幼児を悼む表現などと共通する性格を持っている。またさらに強調したいのが、これらの歌に描かれているのは、人麻呂自身の経験や心情そのままの描写ではなく、「人麻呂の一つの経験を「妻」に別れるという形で物語化した歌で、後宮の女性を中心とする宮廷人たちに語って聞かせる」^(注一八)ものであったらしいことである。この点でも、「歌俳優」柿本人麻呂の歌は、紀貫之自身の経験を、ある女からの視点で、フィクションとして語ったとおぼしい土佐日記と類似すると見られる。

土佐日記には、万葉集にしか見られない表現がしばしば用いられることから、貫之が日記執筆中に万葉集を強く意識していたことが推定されている。なかでも人麻呂について言えば、貫之の自詠に「泣血哀慟歌」の表現を取り入れた作が多く見られること^(注一九)からして、貫之が、人麻呂の「歌俳優」としての歌と土佐日記とが右に述べた共通性を有していることを認識していた可能性は、きわめて高い。さらに、古今

集仮名序に示された、人麻呂を称揚する態度からすれば、貫之は、土佐日記と人麻呂の歌との類似に気づいていたというよりも、むしろ、人麻呂の方法を意図的に継承しようとしていたと考えられるのではないか。^(注二〇)

また、このことに加えて述べておきたいのは、右に述べたような、自らの経験を素材とした文芸を創作し、それを自ら演じてみせるというあり方が、人麻呂と貫之以外にも、それも貫之が身近に親しんでいた文芸のうちに見出せることである。たとえば、

題しらず

僧正へんぜう

名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな

(古今和歌集 秋上 226)

はいかがであろうか。この遍昭の歌の眼目となる趣向は、僧侶たるものが「女郎花」すなわち「女」のために「堕ちた」という、諧謔を含んでいるところにある。もちろん、この歌が、現実の僧正である遍昭自身が女の色香に迷ったことを告白するためのものとは考えにくい。そうではなくて、高位の僧である遍昭が、自らを墮落坊主に擬し、フィクションとしておどけて演じて見せたのが、この歌の趣向なのである。

また、伊勢物語に関する

『伊勢物語』の、最も古くからあった根幹部分は、在原業平自身の創作にかかるフィクションであつたというのが私の説であるが、そのフィクションは、業平自身のパフォーマンストでも言つてよい形で人々の前で語られていたのではないかと思う。…中略…文字による文学が未成熟であつた時代においては、歌う文学・語る

文学が、むしろ中心になっていたことに思いを致す時、今まで見えなかった様々なことが見えてくるのである。みずからエンターティナーでもあった人麻呂と業平が、時代を超えて、意外に近い存在であったことも見えてくるのである。^(注千六)
という片桐洋一氏の発言も等閑視すべきではないと思う。

従来、土佐日記は、仮名文による日記文学の創始として日本の文学史上に位置づけられることが多い。しかし、右に見てきたように、歌俳優としての人麻呂の歌以来、自らを素材として創作したフィクションを、自らが演じるという文芸作品が連綿と続いているのであれば、土佐日記をその伝統を受け継ぐものとして位置づけ、その文学史的な意味合いを再検討してもよいのではないか。

〔注〕

(一) 土佐日記の本文は青溪書屋本の影印により、私に濁点、句読点等を付して示した。

(二) 土佐日記抄は「をとこもすといふ」という定家本の本文を採用している。

(三) 他に、季吟が同書で言及した「男文字にてする日記を 女文字にてかくとの心也といふ説」、具体的には、「昔ヨリ日記ト云へバ、篁日記 平仲日記ナドヤウニ 漢文ノ男も[㊦][㊧][㊨]すといふ日記といふものをコタバハ仮名文ノ女も[㊩]てこころみんとするなり」(橘守部「土佐日記舟の直路」)など、女文字、すなわちひらがなでこの日記を記す、という宣言であるとする説も見られる。しかしこれは、既に北村季吟が「ひがごとなるべし」というように、そのように解釈すべき根拠の十分な説明もなされておらず、承服しがたい。

(四) 萩谷朴『土佐日記全注釈』一九六七年

(五) 注四に同じ。

(六) 福島直恭「男もすなる日記」(国語国文学論集二〇号一九九一年)は、「女が日記を書く」という命題は、当時の一般常識とはあいられない」ということを前提にして、この萩谷説を否定している。すでに指摘されるように、太后御記や亭子院歌合日記等、土佐日記のころには女性の手になる日記も存するので、女が日記を書くということが当時の常識にまったく相容れないとまでは言い切れないけれども、男性が日記を記すことに比して女性が日記を記すことは、当時の常識として、やはり少ないことであつたと、

本稿でも考える。

(七) 注二に示した、北村季吟が紹介し、橘守部らが主張した説。最近では小松英雄『古典再入門』(二〇〇六年)もこの説を主張する。

(八) 木村正中 新潮日本古典集成『土佐日記』(一九八八年)

(九) 小松英雄『仮名文の原理』(一九八八年)

(十) 注九に同じ。

(十一) 竹取物語の本文は天理図書館蔵本を底本とする新日本古典文学大系本による。

(十二) ただし、この竹取物語の「男」は、何らの限定なしに男性全般を意味するのではなく、かぐや姫の配偶者たりうる生殖能力のある男性を指して言っているものと思われる。

(十三) 和歌の本文は新編国歌大観による。以下も同じ。ただし、万葉集の本文は、伊藤博『萬葉集釋注』による。

(十四) 目方さくを「九世紀渡唐僧日記考」(福岡女子大学「文芸と思想」二十二号 一九六二年)等。

(十五) 土佐日記の文章に、漢文訓読調の、いふなれば、男性的な言葉がしばしば見えることから、女の立場からの叙述を一貫させようという意識はさほど強くなかった、と見る向きも多い。これについては「土佐の文章は男性的だといふ批評が多いのは、源氏や狭衣など、平安中期から後期の作品と比較するゆゑであらう。比較するならば、仮名文発達の途上にある延喜—天慶あたりの作品を採るべきである。もつとも、この頃の仮名文資料は、たいへん限定されてをり、特に女性のものが延喜二十一年京極御息所歌合記ぐらゐで(それも確定的でない)、断言はしにくいのであるが、

はつきり男子系である漢文よみの体とは相当程度の差異があるので、やはり女性的な文と認めるのが穏当であらう」(小西甚一『土佐日記評解』)という見解に従いたい。また、「こよひ、かかることとこわだかにものもいはず。いとほしくみゆれど、こゝろざしはせむとす。」(二月十六日)等の描写が、仮託した女性ではなく、貫之本人の視点からの物言いだとする向きも多い。これについては、先ほどとは逆に、源氏物語などの平安中期の物語作品で、草子地と言われる部分とそれ以外の部分で叙述の視点がことなることがあるのと同様に見れば、とりたてて疑するにはあたらなと思う。

なお、男性である人物が女に擬して文芸を創作すること自体は、今こむといひばかりに

長月のありあけの月をまちいでつるかな

(古今和歌集 恋四 691 素性)

など、貫之が親しんでいた作品にもみられることからわかるように、格別に工夫された新しい発想によるものではなかったと考えられる。

(十六) 増田繁夫「日記文学の発生 土佐日記の成立まで」(『日記文学講座』一九八九年)

(十七) 小西甚一『土佐日記評解』(一九五一年)

(十八) 詳細は拙稿「おさなこの死——土佐日記の幼児を悼む記述に関する考察——」(『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』(一九九九年)に述べた。

(十九) 伊藤博『万葉集の歌人と作品』上(一九七五年)で規定され

た概念でもってこの語を用いる。

(二十) 類聚三代格 巻七 本文は新訂増補国史大系による。

(二十一) 石見相聞歌と泣血哀慟歌に関する私見は、拙稿「万葉から古今へ——人麻呂・虫麻呂の流れ——」日本文化学報第七輯（韓国日本文化学会一九九九年）に述べた。

(二十二) 伊藤博『万葉集釋注』一、一三一番歌の注（一九九五年）

(二十三) 具体的な例は、岸本由豆流『土佐日記考証』以来、多くの指摘がある。また、西山秀人『土佐日記』の和歌表現——万葉集との関連をめぐって——（上田女子短期大学紀要三十四号二〇一一年）にも詳しくまとめられている。

(二十四) 拙稿「紀貫之の和歌の表現と人麻呂の泣血哀慟歌をめぐって——紀貫之の作歌の方法——」文学史研究三十号（大阪市立大学国語国文学研究室一九八九年）。

(二十五) 貫之が人麻呂を称揚し、その作品を継承しようとしていたらしいことについては、拙稿「紀貫之の文芸に関する研究」第二章（宮廷歌人）の継承——土佐日記の態度と新撰和歌（二〇一四年度学位請求論文）に述べた。

(二十六) 片桐洋一「人麻呂から業平へ——歌俳優の系譜——」『磔』五〇号 一九九〇年

（みずたに たかし・大阪女子短期大学幼児教育科准教授）